評書

『「鏡」としての透谷　表象の体系／浪漫的思考の系譜』

黒田俊太郎 編

山﨑義光

本書は、明治二〇年代から昭和一〇年代、およそ二〇世紀前半の日本における「浪漫的思考の系譜」を、〈透谷〉を理想（鏡）として参照した文学論議を取り上げて考究した、文学をめぐる文化史的批評史的研究である。

書名に「透谷」の名が付せられているが、北村透谷についての作家論・作品論的な研究ではなく、透谷のテクストにはほとんど触れていない。本書が問うのは、「透谷」という表象が、どのような言説編成のなかで生成し、明治から昭和にかけての文学批評のなかでどのように意義づけられて参照されたかである。

「透谷」というアイコンのもとに集められた言説が、透谷の死後、どのように編成されて流通したかということをまず問題とし明らかにした。そうして流通した「透谷」が、主として一九〇〇年前後の明治期と、一九二七年、一九三〇年代の昭和期における論議の中で、どのような意味を担って参照されたかを追跡した。それによって、近代文学における「浪漫的思考の系譜」を明らかにしようとした。

本書でいう「浪漫的思考」とは、存在したことのないものを失われたものとして表象し、失われたものの根源を想像的に回復することとしている。透谷が関わりもしなかった事柄を透谷に投影すること、あるいは日本の近代化を批判する文脈のなかで「日本的なるもの」を想像的に回復しようとしたときに、透谷を召喚して思考したことを指しているだろう。言い換えれば、浪漫的思考が現れるとき透谷が召喚されているという事態を、明治から昭和にかけての文学論議のなかに探った、といっていいだろうか。

「第一部　表象の体系としてのアンソロジー」では、「透谷」という表象が全集の出版を通じて受容されたとき、その前提となっていた、文学を認識する枠組みがどのようなものだったか、そして透谷が一九〇〇年前後と一九二七年頃という二つの時期にどのような意義づけを付与されて参照されたかを論じた。

「第一章　明治三五年版『透谷全集』―その「商品」性と流通ネットワーク」では、『透谷全集』の装丁や価格、出版社間の関係、広告宣伝方法、著作権法との関係、商品としての流通経路など、北村透谷という作家主体を統一性の原理として集められた言説が、書物として流通した社会的回路を明らかにした。

「第二章　明治三〇年代後半、〈文学〉化されゆく手紙―「透谷子漫録摘集」を起点として」では、『透谷全集』に手紙や日記などの私的な文章群が載録されていたことに着目し、同時代における手紙や葉書に関する言説への注目とあわせて、書き手の〈真情〉を読みとろうとする信仰にも似た文学理解の枠組みが働いていたことを論じた。

「第三章　成型される透谷表象―明治後期、〈ヱルテリズム〉の編成とその磁場」では、明治二〇年代における青年自殺事件の一つとして透谷の自死が位置づけられ、高山樗牛によってゲーテ『若きウェルテルの悩み』を参照しながら論じられて〈ヱルテリズム〉と呼称され、さらに美的生活論とも関連付けられた経緯を跡付けた。透谷が自我発展に努力した青年という論脈に関連付けられたことから、のちの「実行と芸術」論につながる可能性をも示唆した。

「第四章　透谷を〈想起〉するということ―昭和二年、『現代日本文学全集』刊行をめぐって」では、円本『樋口一葉・北村透谷集』が刊行された一九二七年前後、私小説論やプロレタリア文学、文学の大衆化などの文学論議をとりあげた。佐藤春夫は透谷を、国家主義や功利主義といった近代主義への批判的観点から社会的自我を探求した文学者として評価した。一方、プロレタリア文学派の論者たちは、透谷を資本主義に抵抗した文学者として論及した。これらは評価の論脈は異なりながらも、近代主義の批判者抵抗者と見なした点で共通した。

「第二部　日本浪曼派と〈透谷〉」では、一九三〇年代に、中河與一、三木清、保田與重郎、島崎藤村など、日本浪曼派の周辺にいて、新日本文化の会や透谷会にかかわった文学者たちの論議を取り上げた。西洋化としての近代批判、ありうべき真正の近代の創造をめぐる「日本的なるもの」の論脈を跡付けた。

「第五章　中河與一の〈初期偶然論〉における必然論的側面―小説「数式の這入つた恋愛詩」の分析を通して」では、中河が一九三五～三六年の『愛恋無限』発表を境に「永遠思想」を積極的に唱え始めるのに先だって、形式主義論から偶然論にいたる過程で「永遠思想」の萌芽的な思考に逢着していったことを、中河の形式主義論の形成と小説「数式の這入った恋愛詩」の解釈を通して論じた。

「第六章　戦時下日本浪曼派言説の横顔―中河與一の〈永遠思想〉、変奏される〈リアリズム〉」では、中河が偶然に支配された宇宙の真実を追究するものとして芸術をとらえたことが永遠思想として結実し、保田與重郎の影響下に古典回帰への関心を強めたことで、民族・伝統とむすびつくことになった経緯を論じた。中河の永遠思想が、社会主義リアリズムへの批判とともに国策文学への批判をも内包しながら、政治を超越した民族の永遠性と結びついていった脈絡を跡付けた。

「第七章　彷徨える〈青年〉的身体とロゴス―三木清〈ヒューマニズム論〉における伝統と近代」では、中河が永遠思想へ転回していくのと同時期、三木がヒューマニズム論で、確かな外在的思想を喪失し、自我の拠り所を失った「不安」を現代的問題として提起したことを取り上げた。三木のヒューマニズム論が、近代化＝西洋化に抗する自我の拠り所としての伝統回帰という「日本的なるもの」の論脈に巻き込まれていったことを跡付けた。

「第八章　〈偉大なる敗北〉の系譜―透谷・藤村・保田與重郎」では、新日本文化の会と透谷会が設立された一九三七年前後、日中戦争の本格化する時期に、透谷を語る言説と「日本的なるもの」をめぐる言説とが癒着しながら編成されたこ

とに着目した。透谷を近代における詩人＝英雄の血統に連なる「偉大な敗北」者と意義づけたのは保田である。保田は透谷と藤村に「明治の精神」をみた。中河は保田の透谷表象に影響を受け、犠牲の観念に裏打ちされた民族の永遠性を主張する全体主義的傾向を強めて、透谷会設立に中心的な役割を果たす。明治以来の近代化＝西洋化とは異なる、非西洋的で真正な近代を志向する「日本的なるもの」の浪漫的思考は、保田に先んじて藤村にも萌芽的に伏在したことを論じた。

以上のように、出版・流通システムの中での全集の編成や流通、円本による流通規模の拡大という社会的基盤をふまえながら、明治、昭和戦前期に起こった浪漫的思考による文学論議を取り上げて論じた。個々の論議について、複数の論者たちの発言によって複雑に関連し合った経緯を丹念にたどって論じた。それによって、ある種の文学観が理念化されていく過程を、当時の論脈と対立点を的確におさえて論じた。「文学」がどのような社会環境のなかで論じられ、どのような思考の枠組みが形成されたかを明らかにしたところに本書の眼目がある。

本書は、透谷を未成の理想像として参照した文学史上の論議を取り上げて点綴することで、浪漫的思考の系譜を描き出そうとした。具体的には、明治期におけるエルテリズムや美的生活論、昭和初期における社会的自我をめぐる文明批評論争、そして昭和一〇年代の中河與一の永遠思想、三木清のヒューマニズム論、「日本的なるもの」の理念化、保田與重郎の近代批判等の文学論議をとりあげた。これらの論議における「浪漫的思考」の批評性と隘路を明らかにしながら、そこに呼び出された透谷を結び目とする「系譜」として論じた。

ただし、透谷という鏡に映された像が異なることに着眼したためか、明治期と昭和期における浪漫的思考の系譜的なつながりについては、やや見通しにくいと思われた。「鏡」としての透谷という方法は、後世の文学者たちが、自身の生きる時代の「表象の体系」を介して、空虚な鏡としての透谷にいかなる自画像を映したかを焦点に論じることを意味する。したがって、透谷に映し出された内実が異なることの方に重点がおかれ、時期の異なる論議は別々のものとして取り上げられることになったように思われる。各論議のあいだに、何らかの脈絡はあったとみるべきなのか、そうではないのか。つまり透谷を参照したという共通性はあるが、「浪漫的思考」としての「系譜」的なつながりはあったとみるべきなのか、そうではないのか。そこに見通しにくさがあった。たとえば、ゲーテ『若きウェルテルの悩み』は、明治期のエルテリズムで解釈枠とされたが、保田も近代批判の論脈でとりあげていた。あるいは、青年論や人生論は、明治期のみならず昭和期にも盛んだったが、そこには「浪漫的思考」の連続性と変質があったとみることはできるか。各時期の文学論議において繰り返し透谷が呼び出された「系譜」の背景には、「浪漫的思考」として同定しうる連続性を想定できるのだろうか。そういう興味をそそられる疑問が誘発された。

（二〇一八年一二月、翰林書房、二七四頁、三六〇〇円＋税）